

| | |
|--------------|---|
| Title | 『阪大日本語研究』3号 1991.3 要旨 |
| Author(s) | |
| Citation | 阪大日本語研究. 3 P.129-P.131 |
| Issue Date | 1991-03 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/4677 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「デハ」の機能

—推論と接続語—

浜田 麻里

キーワード：接続詞，新しい情報，推論，条件節，転換

「デハ」は従来「転換」の接続語とされてきたが，その本質は話し手が得た新しい情報によって引き起こされる「推論」にある。同様に，条件節系接続語「スルト」「ダッタラ」「ナラ」等も推論に関っているので，これらを一括して「デハ」系接続語と呼ぶ。

「デハ」系接続語の機能としては「解釈」「推論の伝達・確認・補充」「態度表明」「転換」がある。ただし「スルト」は態度表明，転換には用いられず，「ダッタラ」「ナラ」は転換の機能を持たないというように接続語間で機能に異同が認められる。

「のではなく」の機能

小金丸春美

キーワード：「のだ」，「のではなく」，「ではなく」，名詞句化，フォーカス

文末に用いられる形式「のだ」の否定の形は「のではない」であり，その連用形接続の形は「のではなく」である。本稿では，この「のではなく」の機能を，「ないで」「なくて」といった他の接続形式とも比較しながら考察している。

「のではなく」の文は，「[名詞]+ではなく」の文と共通した性質（相互除外性，否定のフォーカスに関する性質など）を持っており，そのような性質は，「ではなく」によるものと考えられる。したがって，「のではなく」の「の」は，文の一部を名詞句化するという構文的機能のみを担っているということになる。

「のではなく」の機能に関する本稿の考察は，すべての「のだ」をムードの形式と考えることはできない，という考えの傍証となるものである。

韓・日両言語の受身構文

李 吉 遠

キーワード：受身形，受身構文，形態論的な対立，対照研究，動作主体と動作客体
 韓・日両言語の受身構文について，特に，作品用例の中の受身表現を比較し，以下のことを述べた。

- ・両言語共に受身文の主語には有情物（人）がくるのが普通である。
- ・両言語共に受身文の動作主体を欠いている用例が多く，自動詞的な表現と受身文との境界が区別しにくい表現がたくさん使われている。
- ・日本語は総てのあらゆる自・他動詞から受身形が作られるが，韓国語は他動詞に限って，また非生産的に受身形が作られる。結局，日本語で受身表現を使う所に，韓国語では能動表現を使う傾向が強いといえる。
- ・韓国語の相手の受身文に二項動詞はほとんど現れないし，三項動詞の場合，受身文ではなく授受動詞でその役割を果している。

日本語学習と日本語の文化的要素

高 偉 建

キーワード：語の意味，文化的要素，日本語学習との関係，教材と授業

日本語学習者が円滑に日本人とコミュニケーションできるようにするには，ことばの学習過程の中で，そのことばと関連のある文化的情報を与える必要がある。

本論文は単語のレベルでの文化的情報を「文化的要素」とよび，「文化的要素」を語の意味の一部分と位置づけ，その記述の基準や範囲を検討し，辞典という形にまとめあげる必要性と可能性を論じた。

その基礎の上で，本論文は更に，「文化的要素」を教材や授業に取り入れる際の具体的な構想を論述し，日本語学習における「文化的要素」の取り扱い方を論じてみた。

方言の語彙

徳川 宗賢

キーワード：方言量，孤例，『日本方言大辞典(SDJD)』，『日本言語地図(LAJ)』，『物類称呼(BS)』

日本語の方言の語彙をめぐって，(1) 方言量（ある標目に関する方言的バラエティの量），(2) 孤例（全国を見渡して，ひとつしか実例のみつからない表現）について概観し，(3) 『日本方言大辞典(SDJD)』と『日本言語地図(LAJ)』と1750年代の方言辞典『物類称呼(BS)』の比較を通じて，方言の語彙の性格と，それぞれの文献の性格を具体的に考える。